

松本清張記念館

◆館報◆
2015.8
第49号

氣の毒な抽選がはじまつた。

赤いくじ

松本清張



『赤いくじ』昭和33(1958)年 光書房

現在入手できる本

『或る「小倉日記」伝 傑作短編集(一)』新潮文庫
『松本清張短編全集2 青のある断層』カッパ・ノベルス
『松本清張全集35巻』文藝春秋

「赤いくじ」(原題「赤い籤」)は、昭和30(1955)年
「オール讀物」六月号に掲載された。

昭和一九(一九四四)年に朝鮮・京城で
新しい師団が編成された。米軍の上陸に備え朝鮮を守備する「守朝兵団」と「備朝
兵団」である。

「備朝兵団」に、参謀長の楠田大佐と、高級軍医の末森軍医少佐がいた。
彼らは、司令部の在所である全羅北道高敞コチヤウで知り合った、出征軍人の妻である塚西恵美子の高貴で知的な美貌に心を奪われ、互いに競い合うようになる。

翌年八月、日本敗戦の混乱のなか、武装解除のために来るアメリカ軍に応じるようにとの指令を受ける。とつさに楠田が提案したのは、慰安婦によるアメリカ軍への「もてなし」であった。目的は知らず、人選はくじ引きで行われ、塚西夫人も該当の赤いくじを引いてしまう――

(専門学芸員 柳原暁子)

目次

- | | |
|-----------------------------|---|
| ● 松本清張研究会第32回研究発表会 | 2 |
| ● 特別企画展『清張と戦争――読み継がれる体験と記憶』 | 5 |
| ● 展示品紹介 | 6 |
| ● 点描 作品の舞台を訪ねて | 6 |
| ● 國際共同研究公開シンポジウム | 7 |
| ● 友の会活動報告 | 7 |
| ● トピックス | 8 |

作品紹介

松本清張研究会 第32回研究発表会

平成27年6月6日(土)午後2時 東京学芸大学

清張映画が数多く作られた時期の映画界

『松本清張の映画化作品』は1957年公開の『顔』にスタートして74年の『砂の器』までの17年間に、実に26本が作られています。全部で36本です。

58年に『張込み』、『眼の壁』、『共犯者』、『影なき声』、『点と線』と、いっぺんに5本。翌年2本、60年は3本、61年は4本、62年は1本、63年に2本、65年に3本です。この八年のあいだに集中的に、松竹が比較的多いが、大映、日活、東映各社で制作をされている。

『日本映画産業統計』(日本映画製作者連盟)の数字を見ると、『一番入場者数』が多いのは1958年で、観客数は11億2745万人。これが65年にになると、3億7267万人で、三分の一くらいの急速な落ち込みになる。映画館のスクリーン数も同様で58年は7067、65年になると一気に減少して4649。70年近くで30000くらいまでに落ちていく。実は58年をピークに雪崩を打つよう、日本映画は急速に斜陽の道を進んでいます。

講演

1960年前後の松本清張

——文学と映画のあいだ——

講師 紅野謙介

日本大学教授



でいくわけです。

『砂の器』が74年で、まさに日本映画が下降を迎えていく時期に、松本清張という作家の原作ものが映画産業にとって、重要な存在として消費されたわけです。

松竹と清張映画

1956年に松竹は、配給の収入で東映に首位を奪われるという屈辱的な事態になります。

翌年、挽回しようとして松竹は東映の方法に追随しようとします。東映は、片岡千恵藏や大川橋蔵という時代劇スターをそろえ、これに美空ひばりなどが共演をして、明朗闊達な時代劇路線を中心に『三本立て興行』で多くの観客を集め、成功していたのです。しかし上手くいかず、同年すぐに『一本立て』に戻します。それでも上手くいかない。57年、松竹は配給の収入で東映にも負け大映にも負けて、第二位に落ちます。

1958年に『張込み』が作られるが、映画界の一番いい年にすでに、松竹は81歳の大谷竹次郎が製作を担当するなど映画企業として混迷の度を深めていました。対して、日活は石原裕次郎の『嵐を呼ぶ男』が大ヒットします。東映は初のアニメ映画『白蛇伝』を公開します。この年、東映、大映、日活、東宝で、松竹は何と最下位の第五位で、屈辱的な惨敗を味わいます。

1959年11月、大島渚の『愛と希望の街』が

公開されます。大島は、新しい前衛的雰囲気をもった映画監督でした。しかし、城戸四郎の「新大船調」のメロドラマ路線に合わないといふことで、公開は一部の映画館に限定されました。

が、とりあえず、新しい芽は一つ出てきた。60年になると、松竹の株は無配、配当が出せないという事態に陥ります。6月に、大島が第二作『青春残酷物語』を出して大ヒットします。松竹の救世主となり、松竹ヌーベルバーグにつながっていきます。8月に『太陽の墓場』、10月に伝説的作品『日本夜と霧』が公開されます。60年代初頭にかけての日本の左翼、学生運動の分裂を描いた映画ですが、浅沼稲次郎社会党

委員長の暗殺事件が起きた直後、公開中止になってしまいます。松竹は一時は大島に期待をかけたが、その希望を自分たちで揃んでしまった。翌年、大島は退社し、64年には当時、松竹の代表的な看板スターだった佐田啓二が車で事故死をする。

このように松竹という会社の歴史を見ながら、清張映画化作品のケースと照らし合わせますと、57年の『顔』あたりから、すでに『張込み』の著作権も獲得していましたが、松竹の従来の路線から一步違う方向に踏み出そうとして模索が始まります。58年に『張込み』、『眼の壁』が作られていくことを考えますと、松竹がやはり清張作品に、一縷の希望を見出そうとしても言えないだけに、それは内攻した。小説ではこのわずか三行くらいです。

『影なき声』

日活で映画化されたのは、1958年の『影なき声』という鈴木清順監督の映画です。原作の『声』という短編は、新聞社の電話交換手だった女性が主人公です。ある日、間違えて殺人現場に電話をつないでしまう。電話に出た相手、つまり犯人の声が耳に残るが、事件はお蔵入りになる。

その後、彼女は結婚して会社を辞める。夫の知り合いの声が誰かに似ている気がする。そこからミステリーが深まっていく。その男から来た電話で話した瞬間に「あのときの声だ」と記憶がよみがえって、前半部分は終る。そして後半になると、彼女の死体が発見される。これが小説の方ですね。

映画は、実は小説のように視点を途中から全く変えてしまうと、つながりが非常に難しいので、南田洋子の演じるヒロインは死はない。殺されるのは実は声の側の男(宍戸錠)。警察はヒロインの夫を犯人と考えて、逮捕してしまう。彼女は、真犯人を新聞社の上司の記者(二谷英明)とともに調べ始める。物語構成は小説と大分違っています。



『そのことがあって四五日が、朝子を瘦せさせた。疑惑と恐怖が襲う。夫には言えなかつた。ここまで來てもやっぱり言えない。(中略)ひとりで知つた秘密に懊惱した。誰にも言えないだけに、それは内攻した。小説ではこのわずか三行くらいです。

映画で懊惱をどう表現したらいいか、実は非常に難しい。

鈴木清順監督はそのヒロインの懊惱を、彼女の夢、妄想の世界を通して非常に巧に映画化しています。麻雀を終えた犯人グループと夫が出かけていく。彼女も外へ出て、そして部屋に戻って鍵を開けると、宍戸錠がそこにいる。思わず叫んで、アパートの廊下を奥の方に走っていく。また別な部屋を開けると、そこにも宍戸錠がいる。次々に扉を開けると、そこに同じ人物が同じポーズで現れてくる。そういう不安や恐怖の表現の仕方を鈴木監督は巧に行つた。つまり、小説の中では、スピードにストーリーを開拓するために省略している部分に、映画の作り手たちは逆に自分たちなりに自由にできるカンバスを見出したと言つてもいいかもしません。主人公の背後の鏡台に襖を開けて宍戸錠が現れるところが映る。鏡を使って、彼女の不安を観客にも搔き立てられる形で描き出す。こういう映像的なテクニックを駆使するのに、逆にいえば、清張作品の非常に簡潔で、ある意味では抽象的な書き方が、映画の作り手たちにとってインスピレーションを刺激する、想像力を搔き立てる要素になつたと言えると思います。

『張込み』

野村芳太郎は職人的な監督で、『張込み』を作り、青春物、喜劇物など、非常に軽い映画を作りました。1958年の『張込み』の段階になつて大きく変わつてくる。野村監督は橋本忍と組んで独自な映画作りを始めていく。橋本忍は張込みをする刑事は一人か二人かなど、小説のディテールをとことん洗いなおした上で脚本化に取り組んだ。これによつて『張込み』という映画は非常に

面白い優れた作品になつております。

今、『張込み』の有名な冒頭シーンを観ました。

面白い優れた作品になつております。

非常に長い、十分ちかくたつてようやくタイトルが出る。これだけ長いタイトル前（アバンタイトル）は珍しいが、これがプロローグなんですね。小説の冒頭、文庫本でも2ページぐらいの部分が、映画ではこうなつてているわけです。

小説では季節は秋ですが、映画では夏で、夏の暑さが、車内の扇風機が繰りかえし繰りかえしカットとしてインサートされ、汗が滴り落ちる感じに非常によく出ていました。長旅の疲労感もよく出でています。描写の一つ二つに、映画の世界ならではのものが出てくるわけです。宮口精二という俳優が疲れたおじさん感を非常によく出しているといつていい。

またそれまでのようにスタジオで撮るのではなく、横浜駅のシーンは隠し撮りで全部実写で撮つたそうです。走り出している列車に飛び乗るというシーン自体が、小説の描写とは違うものですね。躍動感が映画によってよく出て来ている。列車を映画的に見ると、動きを非常に強く感じさせる。その動きをこの野村監督は非常に上手く撮っている。

研究発表

松本清張とラオス ——ベトナム戦争の記述をめぐって

発表者 尾崎名津子

日本大学非常勤講師



戦争と(ジャーナリズムと)一人の女

主人公はジャーナリストの谷口爾郎。友人の死の真相を探るために、内戦中のラオスの首都にやって来ます。西洋人がホテルで絞殺され、その事件に好奇心を抱いた現地在住の日本人も射殺されてしまう。ついには、謎を追う谷口にまで魔手が迫り——谷口は発狂した状態でメコン川に浮いているところを見つけられます。

『象の白い脚』(原題『象と蟻』)は1969年8月から一年間「別冊文藝春秋」に連載されました。同年5月18日から24日までラオスに取材を行っています。松本清張はこの前に北ベトナムに行って、ファン・バン・ドン首相にも会っています。68年中、特に4月中は、多くの新聞、雑誌に記事を書いています。同年の4月に開高健の今回取り上げる『輝ける闇』が新潮社から書き下ろしで刊行されています。

『象の白い脚』と『輝ける闇』は発表時期がほぼ同時期で、両作ともジャーナリストが主人公で、書く男が東南アジアに行くというモチーフを持っています。今日は『女性と言葉』との関係から両作品を読み解いていきます。

まず『輝ける闇』の視点人物である「私」は、言葉と戦争をどのように捉えていたか。作品中、紙のなかで人びとは戦争を嘆いたり、響きと怒りを投げかけてくるが、言葉は「私」に届かない。「私」とはいつさい共鳴しない。次に「私」の

ている。映画の作り手たちは清張作品にインスピアイアされることによって、高度成長期に変わつていく街の風景や自然をしっかりとカメラに押え、記録していく。清張作品のそうしたところが、職人的な監督の一人であった野村芳太郎を、これは自分にとって本気になる作品だと意識させたのでしょう。

松本清張はすさまじい分量の作品をお書きになっていますよね。ある意味では体力の限界に挑むような書き方をしている。こういう書き方では、描写の一つ二つをディテール細かく書き込んでいくというよりは、やはりざつくりと大きな歩幅で歩んでいくような、物語の作り方を可能にする、映画ならではの世界を確立する、『豊穣な空白』を見出したのではないかと思います。少なくともこうした『豊穣な空白』は、ちょうど危機にあつた、まさに下降しつつあった日本の映画産業にとつてみれば、新たにそこに一つの可能性を見出し、映像作家としての歩みを残していくべき、そういう材料と捉えていったのが、『豊穣な空白』を見出したのです。

清張原作の『豊穣な空白』

しかしそこに逆に、映画の作り手たちは自分たちで味付けできる、具象化できる、そういう世界を見出した。作家のネームヴァリューもあります。しかしそれ以上に、映画の作り手たちにとっては非常に刺激的なアイデアとストーリー、そしてむしろ余白の部分に彼らの表現を可能にする、映画ならではの世界を確立する、『豊穣な空白』を見出したのではないかと思います。少なくともこうした『豊穣な空白』は、ちょうど危機にあつた、まさに下降しつつあった日本の映画産業にとつてみれば、新たにそこに一つの可能性を見出し、映像作家としての歩みを残していくべき、そういう材料と捉えていったのが、『豊穣な空白』を見出したのです。



「戦争に関する認識です。『私は狭い狭い薄明の地
帶に佇む視姦者だ』、とおっしゃいます。また、残忍なこ
とを残忍だと名付けてしまったことへの抵抗が、
『私』には強くある。言葉にすることへの抵抗が
かなり強くある。戦争を言語化することの不可
能性の状況のなかで、『私』はベトナム人の素娥
(どうが)という少女と愛人関係にあります。素
娥という存在を通して、というよりも素娥自身
が言葉を作り出すわけです。そして、素娥と作り
上げた言葉しか『私』の中に根付かない。

最後の場面、「私」は素娥を離れて戦争の最前
線へ向います。自分を視姫者と規定しておきな
がら、開き直って「見ることはその物になること
だ」と認め高らかに宣言して、ついに『私のため
の戦争だ』と言つて戦地へ向つていく。すなわ
ち、素娥によつて言葉が生み出されたように、
「私」は自分自身の手で自分に形を与えるために
戦場に向うわけです。

一方、松本清張の『象の白い脚』で素娥と役割
が重なるのは、フランス人の女性記者のシモーヌ
です。通信員としてろくに働いてないらしい
と噂され、アル中とも言われているが、テクスト
をよく読むと、実はたいして酔つていらない、明
晰な頭も持つてゐるようです。結局、谷口と一回
だけ肉体関係を持つ五十代の女性ですが、作中、
「あんたのほうがよっぽど取材能力がある」と、
シモーヌは谷口にジャーナリストとしてのパ

「かつて」との相似

清張とエドガー・スノーの対談「中国と北ベト
ナムはどう出るか」は、『象の白い脚』の前年に掲
載されています。ベトナムも含めた世論がベトナ
ムと日本を重ねがちだったのに対し、清張はむ
しろアメリカと日本とをアナロジカルに語つて
いる。これが非常に特異な点です。太平洋戦争と

『象の白い脚』と『輝ける闇』において、共通の
女性の役割は男性に言葉を与えることです。開
高の『輝ける闇』の場合はジャーナリズムの言葉
の対極に位置する何がしかが女が与える言葉だ
と思います。言葉の発生 자체、言葉の始原をつか
む営みを、女性が役割として担つていく。一方
で、『象の白い脚』は、単にシモーヌの言葉は謎解
きに使われているとしか読めないかもしれません
。しかし、よく見ると、谷口はシモーヌから言
葉を与えられることによって、次のステップへ
と思念を深めることができる。その点である意
味、別の新たな言葉の発生を女性のシモーヌ
が担うと言えるのではないかと思います。

ラオスは日本を映す鏡

「ベトナム戦争は日本を映す鏡」だとはハイブ
ンズも川村湊氏も言っていますが、清張にとって
はむしろ「ラオスこそが日本を映す鏡」だったの
です。清張は三つの視野を持っていました。まず
一つは「あの戦争」、つまり「アジア・太平洋戦争」
との相似の在り様。ベトナムと日本を重ねないこ
とで、アメリカと日本をアナロジカルに捉えてい
る点が特異です。二つ目は「あの戦争」の継続
1945年8月15日で「あの戦争」は終つていな
いということです。そして、三つ目は「この戦争」、
つまりベトナム戦争、インドシナ戦争以後の日本
のあり方です。具体的には、技術支援への興味を

せ、書く方へと導いていく役割を果たします。
では、シモーヌはどのような言葉を谷口に与
えていくのか。『輝ける闇』の素娥とは質が違う
言葉を与えます。谷口が明かそうとしている謎
に迫る、そのヒントとなる言葉を与えるのです。

谷口の推理が始まつていく、そのような機能を
もつ言葉です。谷口が最後に東京の友人に宛て
た手記があります。その中でも、谷口はシモーヌ
の言葉に導かれ、その言葉を幾度も思い返して、
業を行なつてゐるわけです。

アメリカで、蟻＝ベトナムなのです。『象の白い
脚』に改題したとき、象はラオスであると同時
にアメリカである、ダブルミーニングの可能性を
を感じさせます。というよりも、原題はアメリカ
＝象なのでから、本来の清張の興味がどこに
あつたのかが仄見えるわけです。松本清張記念
館での調査で、CIAの阿片工作を始めとする
ラオスへの内政干渉の記述が、後から大量に加
筆されていることがよく分かりました。清張の
ベトナム戦争、インドシナ地域に対する興味は
アメリカへの興味が先立つてあつたのです。ベ
トナムを書かない、戦場行為の悲惨を書かない
清張の態度は、今まで開高と違つて戦場に行
けなかつたからだとか実際的な理由によると言
われてきましたが、そつではなくて、興味の持ち
ようによる選択なのではないかと思うわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

清張が有し、行き届いた目配りをしていました

べトナム戦争を重ね、相似形として捉えるとい

う、繰りかえし暗示のように谷口を考えさせ

せ、書く方へと導いていく役割を果たします。

点は、戦争を知る世代であれば同じなのですが、

その視点の内実が異なつてゐるのです。

そもそもこの小説の原題は『象と蟻』で、象＝

アメリカで、蟻＝ベトナムなのです。『象の白い

脚』に改題したとき、象はラオスであると同時

にアメリカである、ダブルミーニングの可能性を

を感じさせます。というよりも、原題はアメリカ

＝象なのでから、本来の清張の興味がどこに

あつたのかが仄見えるわけです。この「何でも見えるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

清張が有し、行き届いた目配りをしていました

す。こうして過去、現在、未来のそれぞれに届く清

張の視線が、『象の白い脚』には籠められているので

す。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪郭に見当がつかない』
とラオスを評しているわけです。見ているよう
で、実は全部見えていないのじゃないか、という
疑いを籠めたこの感覚は、『象の白い脚』という物
語自体にも向けられるかと思います。実は、この
小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子
の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂
したか、これらの謎がどれ一つ明らかになつてい
ないので。大変雄弁に語られているように見え
て、実は何一つ本当のことが書かれていません。
まさに「何でも見えるが何にも見えない」状況が
小説を通して、書かれているわけです。

開高健は「南の墓標」で、「輝ける闇」というタ

イトルにした理由を述べています。ハイデッ

ガードが「何でもあるが何にも見え

ないようでもある」現代という國式が、清張の

ラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当が

つかないのが、気持にとけこめない主な理由かも

しれない」と言います。開高は「何でも見えるが

何にも見えない」という感覚を吐露しましたが、
清張は『象の白い脚』で『輪

清張と戦争 ——読み継がれる体験と記憶



本年は第二次世界大戦終結後70年の節目の年にあたります。

松本清張は昭和18年10月、33歳で教育召集となり、三ヶ月後に一旦解除となります。19年6月に再度召集され、衛生兵として従軍し、20年8月15日、朝鮮半島で敗戦を迎えました。

軍隊の中の人間関係、上下関係、そして強固な官僚機構を確かな視線で捉えたことが、後の作品世界にはかり知れないほどの理解をもたらすことになりました。

本企画展では、自伝的作品である「半生の記」を中心に、清張の戦争体験、戦時下での様々な出来事、それらを色濃く写した作品世界を、今に残る史料とともに紹介します。



開催期間：平成27年8月1日(土)
～12月23日(水・祝)
場所：松本清張記念館2階ホール
入場料：一般 500円 中高生 300円
小学生 200円
※常設展示観覧料含む

I 出征—朱い蔵書印の記憶。

出征前日、死を想定して行ったのは、蔵書に印を捺すことだった。



清張が捺した蔵書印。



「家庭書道講座」吉澤義則著
1937(昭和12)年 朝日新聞社(清張蔵書)
清張が蔵書印を捺した本のうちの一冊。

III 召集—赤紙が来た。

入隊検査で言われた謎の言葉——「ハンドウを回されたな」。

なぜ自分が召集されたのか。



文春文庫新装版
『遠い接近』
2014(平成26)年



「軍隊内務令」
川流堂発行(清張蔵書)
1943(昭和18)年

V 懲罰—接待婦を強いいる、赤い紙燃。

くじ引きで行われた女性の人選。

モーパッサンの小説との(近似性)がそこに。



『東京旋風 これが占領軍だった』
H·E·ワイルズ著 井上勇訳
1954(昭和29)年 時事通信社
(清張蔵書)



『脂肪の塊』
モーパッサン著 水野亮訳
1938(昭和13)年初版 1953
(昭和28)年発行 岩波文庫
(清張蔵書)

II 逃亡—赤い煉瓦堀の誘惑。

兵営を取り囲む赤煉瓦の低い堀を見るたび、逃亡したい誘惑に駆られた。



「回想的自叙伝」(のち「半生の記」)直筆原稿
年1月
1963(昭和38)年8月
「文藝」
1965(昭和40)



『作家の手帖』
1981(昭和56)年 文藝春秋



『世界歴史事典 第22巻 史料篇 日本』
1955(昭和30)年 平凡社(清張蔵書)

IV 設計—為政者の胸中、たぎる炎の赤。

伊藤博文の「大日本帝国憲法」と山県有朋の「軍人勅諭」。

その制定にまつわる物語。



『西哲夢物語』 1887(明治20)年(清張蔵書)
自由民権派によって秘密出版された憲法制定関係資料を収めた小冊子。
作品「夏島」では(わたし)が昭和49年に(九万八千円で)買ったとされる。



研究(創作)ノート「宰相論」
清張自筆「研究(創作)ノート」の中の一冊。約30ページにわたり、主に〈読書録〉として、宰相たちの伝記類から要点や掲載ページを書き留めている。

展示品紹介

幅広い分野で活躍した清張の仕事を紹介するため、第一展示室ではジャンル別での展示を行っている。

入ってすぐの場所に「現代小説」のコーナーがある。ここには、明治期以降の時代背景が舞台の小説ならなんでも入るわけだが、推理小説や現代史ノンフィクションなどは別に紹介するので、ここには入っていない。主に文芸誌や月刊・週刊誌に掲載された現代小説の大半がこれを占める。その中に、女性雑誌に掲載された作品群というものがある。

現在当館で展示しているのは、「波の塔」が掲載された一九六〇年三月三〇日号「女性自身」と、「砂漠の塩」が掲載された一九六五年一〇月号、一二月号の「婦人公論」である。



（女性自身）

「女性自身」は、「波の塔」連載が始まった一九五九年の前年に創刊されたばかりであった。高度成長期の日本に、女性週刊誌が相次いで発刊された、まさにその時である。女性誌に限らず、週刊誌ブームが起つたこの頃、清張は有望な書き手だった。清張自身も発表の場を限定せず、様々な媒体にチャレンジしていた。

（砂漠の塩）

（婦人公論）

「女性自身」は、「波の塔」連載が支持された結果といえるだろう。その他にも「霧の旗」（「婦人公論」）、「風の視線」（「女性自身」）、「花実のない森」（原題・黄色い杜「婦人画報」）、「絢爛たる流離」（「婦人公論」）、「神と野獣の日」（「女性自身」）など、以上の大半の主なものに加え、さらに多くの女性誌に書かれた作品がある。

これらの小説は、雑誌を離れて他の作品と並んで書籍に收められたが、何の遜色も違和感もない。それは、清張が単にメロドラマや恋愛小説を書いたのではなく、女性たちに向けて力強いメッセージを届けたからではないだろうか。

（専門学芸員 柳原暁子）

幅広い分野で活躍した清張の仕事を紹介するため、第一展示室ではジャンル別での展示を行っている。

戦前からの老舗「婦人公論」に連載された「砂漠の塩」は、これにあわせ清張と女優・新珠三千代が中近東取材旅行を行い、グラビア記事を掲載するという力の入れ様だった。毎号、その取材で撮影された現地の写真が使用されており、臨場感が漂う。中近東での新珠三千代は、洋装にサンガラス姿で、砂漠の国を果敢に歩く女優といった扱いだ。事実、日本では前年に海外渡航自由化が始まつたばかりで、この取材旅行はなかなかの冒険だったと思われる。「砂漠の塩」は一九六六年に第五回婦人公論読者賞を受賞した。やはり女性読者に支持された結果といえるだろう。

『波の塔』『砂漠の塩』掲載誌

作品の舞台を訪ねて

「眩人」——玄昉といふ人④東大寺盧遮那大仏

清張は玄昉が果した役割を次のように表現する。

玄昉の死によって聖武・光明治政の玄昉的なものが終つたのではなく、その後もますます進展するのである。（中略）玄昉が宮廷に植えつけたものは彼の死によつて絶えたのではなく、その根はひろがり、強靭に成長し、道鏡を迎える榕樹の密林となつていたのである。

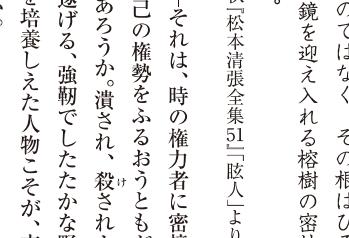
（文藝春秋「松本清張全集51」「眩人」より）

（同上）

よくもそこまでやつた、と自分は心から感嘆せ

ずにはいられなかつた。（中略）唐から帰つた玄昉のひと言から皇后と皇帝のこの国家的な大事業国

家的な大浪費となつたのだから、空恐ろしいかぎりである。



東大寺大仏殿

作中、彼は唐の則天武后的時代に寵を得た、薛懷義のやり方に倣おうとする。つまり、権力に近い女人に取り入つて、倭國にも（大像造立）

遥か古代の日本で、異国から経論や仏像のほか、先人の生き方までを将来し、自らの意思に殉じた人間がいた。史料に描かれた怪僧の深奥に分け入り、清張が見出したのは多面性を秘めた不可解なひとりの人間ではなかつたか。清張は、「眩人」とは、人の眼を眩惑する、胡魔化す、というのであって、古代から中世にかけて中国の西部を根拠地に長安にきていたイラン系胡人の奇術師、曲芸師のことである。これが奈良朝の遣唐使や留学僧などにくついて来日し、奈良に居住したというのがわたしの想像である。（※）と記し、作品では李密窮として結実する。が、その創作力をかきたてた玄昉もくついて来日し、奈良に居住したというのがわたしの想像である。（※）と記し、作品では李密窮とされない。（終）

留学生の話によって、旧師である玄昉の死や大仏の完成を知り、次のように語る場面がある。

（※執筆のことば「眩人」新連載予告（中央公論）一九七六年七月号掲載）

（加地尚子）



（東大寺大仏）

（玄昉）——それは、時の権力者に密接し、策謀をめぐらせて己の権勢をふるおうともがく、一個人の生き様であろうか。潰され、殺されようとも転生し、復活を遂げる、強靭でしたかな野心家の系譜。その萌芽を培養した人物こそが、玄昉であったということか。

（文藝春秋「松本清張全集51」「眩人」より）

内にあったのは、或いは、命をも頼みることのない激烈な野望であり、或いは、仏教興隆への堅固な覚悟であつたといえまい。異なる熱を放つ複数の思惑があり、ひとの同じ人間の内面で、錯綜しているように思えてならない。

遥か古代の日本で、異国から経論や仏像のほか、先人の生き方までを将来し、自らの意思に殉じた人間がいた。史料に描かれた怪僧の深奥に分け入り、清張が見出したのは多面性を秘めた不可解なひとりの人間ではなかつたか。清張は、「眩人」とは、人の眼を眩惑する、胡魔化す、というのであって、古代から中世にかけて中国の西部を根拠地に長安にきていたイラン系胡人の奇術師、曲芸師のことである。これが奈良朝の遣唐使や留学僧などにくついて来日し、奈良に居住したというのがわたしの想像である。（※）と記し、作品では李密窮として結実する。が、その創作力をかきたてた玄昉もくついて来日し、奈良に居住したというのがわたしの想像である。（※）と記し、作品では李密窮とされない。（終）

（※執筆のことば「眩人」新連載予告（中央公論）一九七六年七月号掲載）

「現代東アジア文学史の国際共同研究」第3回ワークショップ 公開シンポジウム開催



科学研究費助成による国際共同研究「現代東アジア文学史」(2013.4～2017.3) のワークショップを、東京大学、台湾大学に続き当館で開催します。公開シンポジウムでは、東アジアポストモダン期文学の受容と変容、ポストモダン期アジアにおける作品の映像化、舞台化などについて、各国の研究者が発表し意見交換を行います。ぜひご参加ください。

2015年8月22日(土)

10:00～10:40

基調講演 「夏目漱石と魯迅：『夜の支那人』事件から『阿Q正伝』まで」

東京大学大学院教授 藤井省三氏

藤井省三氏プロフィール

専門：現代中国文学、中国語圏映画の研究など。

著書：『魯迅と日本文学——漱石・鷗外から清張・春樹まで』東大出版会 2015

基調講演は申込制

氏名、電話番号を、電話かFAXで【松本清張記念館公開シンポジウム係】までお知らせの上、お申込みください。

10:40～17:00 公開シンポジウム① }※申込不要／参加無料／昼休憩あり

8月23日(日)10:00～17:00 公開シンポジウム② }

主催：東京大学文学部中国語中国文学研究室・北九州市立松本清張記念館 会場：記念館地階映像ホール

友の会 活動報告

●朗読劇「駅路」「青春の彷徨」

5月30日(土) 参加者 162名

記念館 地階ホール

春の恒例行事となった劇団前進座による朗読劇。今年は、雨のため屋外特設スタンドが使用できず、館内での開催となりました。これまでに11回開催していますが、1日2作品の上演は今回が初めてです。いずれも短編でしたが、見事な脚本と役者さんの素晴らしい演技力で清張小説の世界が会場いっぱいに広がりました。また、屋外とは違った凝縮された空間の中での演技は、役者さんの息づかいが伝わり迫力満点でした。今回も、会場を埋め尽くした参加者の皆様から、多くの称賛の声をいただきました。



●清張サロン

清張サロンは、清張作品や清張に関する話題をテーマとして、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流等を目的として開催しています。第7回は、記念館との共催として、友の会会員のほか一般市民の参加も募りました。今回も講師の方々に清張作品を掘り下げて解説していただき、とても充実したサロンとなりました。

第6回 3月27日(金) 参加者 25名 記念館 地階ホール

- ・テーマ 「軍師の境遇」—黒田官兵衛のこと—
- ・講 師 小林慎也氏(元梅光学院大学教授・友の会会長)

第7回 6月19日(金) 参加者 53名 記念館 企画展示室

- ・テーマ 「象の白い脚」—松本清張の「駐在員小説」—
- ・講 師 久保田裕子氏(福岡教育大学教授)

●文学散歩「菊池寛記念館と小説の舞台を訪ねて」

5月17日(日)～18日(月) 参加者 36名

1日目 岡山駅→菊池寛記念館→靈山寺→渦の道→高松市中央公園

2日目 雲辺寺→瀬戸大橋→倉敷美観地区→吉備津神社

今回は、瀬戸大橋を通って四国に渡り、高松市にある菊池寛記念館や小説「網」に登場する四国霊場、「内海の輪」に登場する倉敷などを巡りました。菊池寛は、清張が敬愛してやまなかった作家で、清張自身も高松市を訪れ、中央公園にある菊池寛の銅像を見ていました。2日目の雲辺寺は、香川県と徳島県の県境の山の上にあり、ロープウェイで上ります。登山道は急坂で「遍路ころがし」と言われています。今回は1泊2日の旅行でしたが、清張作品等に関係のある場所を中心に各地を訪問し、参加された皆様から「楽しく勉強ができた」「毎回参加したい」などの声が寄せられました。



●友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、『友の会だより』の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしています。

**友の会入会のお申し込みは
TEL.093-582-2761**

北九州市立松本清張記念館 友の会事務局まで

平成27年度 中学生・高校生 読書感想文 コンクール



- ◆応募対象 全国の中学生・高校生
- ◆課題図書 中学生・高校生ともに下記から一作品
 - 「球形の荒野」(『球形の荒野』上・下 文春文庫)
 - 「遠い接近」(『遠い接近』文春文庫)
 - 「共犯者」(『共犯者』光文社文庫、『共犯者』新潮文庫)
 - 「西郷札」(『西郷札』光文社文庫、『西郷札』新潮文庫、『宮部みゆき責任編集 松本清張傑作短篇コレクション』下 文春文庫)
- ◆応募方法
 - 中学生・高校生ともに 1200 ~ 2000 字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
 - 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数 × 行数を記入してください。
 - 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要な場合はコピーをおとりください。
- ◆応募締切 平成27年10月31日(土) ※当日消印有効
- ◆応募先 松本清張記念館 読書感想文コンクール係
 - ※応募用紙は記念館 HP からダウンロードできます。
- ◆選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。
- ◆発表 最優秀賞、優秀賞の受賞者には、12月下旬頃、本人と学校に通知し表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。
- ◆賞と商品(受賞人数等、変更の場合もあります)
 - 最優秀賞(1名)《モンブラン》万年筆「マイスター・シュテュックNo.149」
 - 優秀賞(中学の部…1名)(高校の部…1名) 文具など(未定)
 - 佳作(中学の部…3名)(高校の部…3名) 図書カード他

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。過去の受賞者からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。
- 協力 モンブランジャパン

編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL093-582-2761
FAX093-562-2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 有限会社シーズ



イラスト・山藤章二

開館時間:午前9時30分~午後6時 [入館は午後5時30分まで]
観覧料:一般500円[400円]・中高生300円[240円]。
小学生200円[160円] []内は30名以上の団体料金
○JR小倉駅より徒歩15分・西小倉駅より徒歩5分
○バスは《小倉城・松本清張記念館前》下車
○車は北九州都市高速、大手町ランプより5分

第17回

松本清張研究奨励事業 入選企画決定

17回目を迎えた「松本清張研究奨励事業」には、10点の応募企画が寄せられました。選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

第一線で活躍される入選者も増え、成果の蓄積が清張研究をさらに発展させてています。今回の入選企画も、松本清張の活動の幅広さを示し、成果が期待されます。

【企画名】 作品中の鉄道乗車記録詳細と文学的効果の考察
——清張世界への乗り鉄論的アプローチ

【入選者】 赤塚 隆二 元朝日新聞西部本社記者

【企画名】 イタリア社会派推理小説の成立における松本清張作品の受容
——『霧の会議』とレオナルド・シャーシャ

【入選者】 吉村 法子 立命館大学大学院博士課程

第18回

松本清張研究奨励事業募集

■対象

①松本清張の作品や人物を研究する活動

②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)

上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。

■内容

入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。

■応募方法

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(すべて様式は自由、ただし日本語)を、平成28年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧になるか、記念館までお問い合わせください。



編集後記

戦後70年の企画展「清張と戦争」に取り組むこととなり、関心がなかった戦争や軍事について、急遽学びはじめた。防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室や戦傷病者史料館を訪問、当時を伝える生の史料と接し、今まさに戦後を生きていることを知った。昨今、自衛をめぐる論争が賑やかであるが、武力に頼ることのないよう、日頃のなにげない交流こそ大切にしたいと強く思う。この夏、東アジアの国々から研究者が集う、国際共同研究シンポジウムが当館で開催される。清張がどう読まれているのか、異国の研究者の声に耳を傾けたい。(N.K.)

